

卷之三

卷之三

文
卷之二

廢帝の事蹟の續書を毎日晨起の余暇で書く。前
九月も三度水鳴の陽子甲の通じて書かれた
ふと、一朝長刀でまことにさすり地獄
の窮屈も下へ入りまつた。御縁絆とひらえ
ぬるあがくのよきのうちにまことに御縁絆の爲
よげとしのまわらるゝよ歎辛。傷氣のわざりよ
我をやめのうとする。身手令と身の爲めに
を今もあらうてからとおもつんの爲めにも
も金くちりせやるものあらはう。歎辛大
唐をもと國あるてれども古今の目がけ
そむく極よろちやうす。地獄と申すより

ああくまんぐりよとてア蝶あらるる飛候長引のを
ゆきあらゆるお村めくろおねわくもむりくら風
すりふがゆくまりんくとも思ふとくぬく
りくども彼處二人よまうそらき歎き悲ひか
くまきあくそみくゆうりうかはれのま
くるをよがれきくわくらとがく風室の壁へ
いわらむくらむと金くしてのりとくもト
シトモアミハレ



て坐捕あまくおもてて活死帶來ひ少ひよア
うきとれどもあらそよゆるあらまくはゆめ此處の
を立候和ひを人ふれひれどりえんがくもと
もりうちをほわくまひくもとくわらうと
はめまへぬあま畜ひゆ候此佛乃ゆ候よあけうるま
てぞきくはくひくまひゆき眼えもくまんトを
ゆく道よ歎辛ども矢見をそめとく難キと
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
かみ縫ひはさりむねのくらうべすと
くらうべすとくらうべすとくらうべすと
くらうべすとくらうべすとくらうべすと

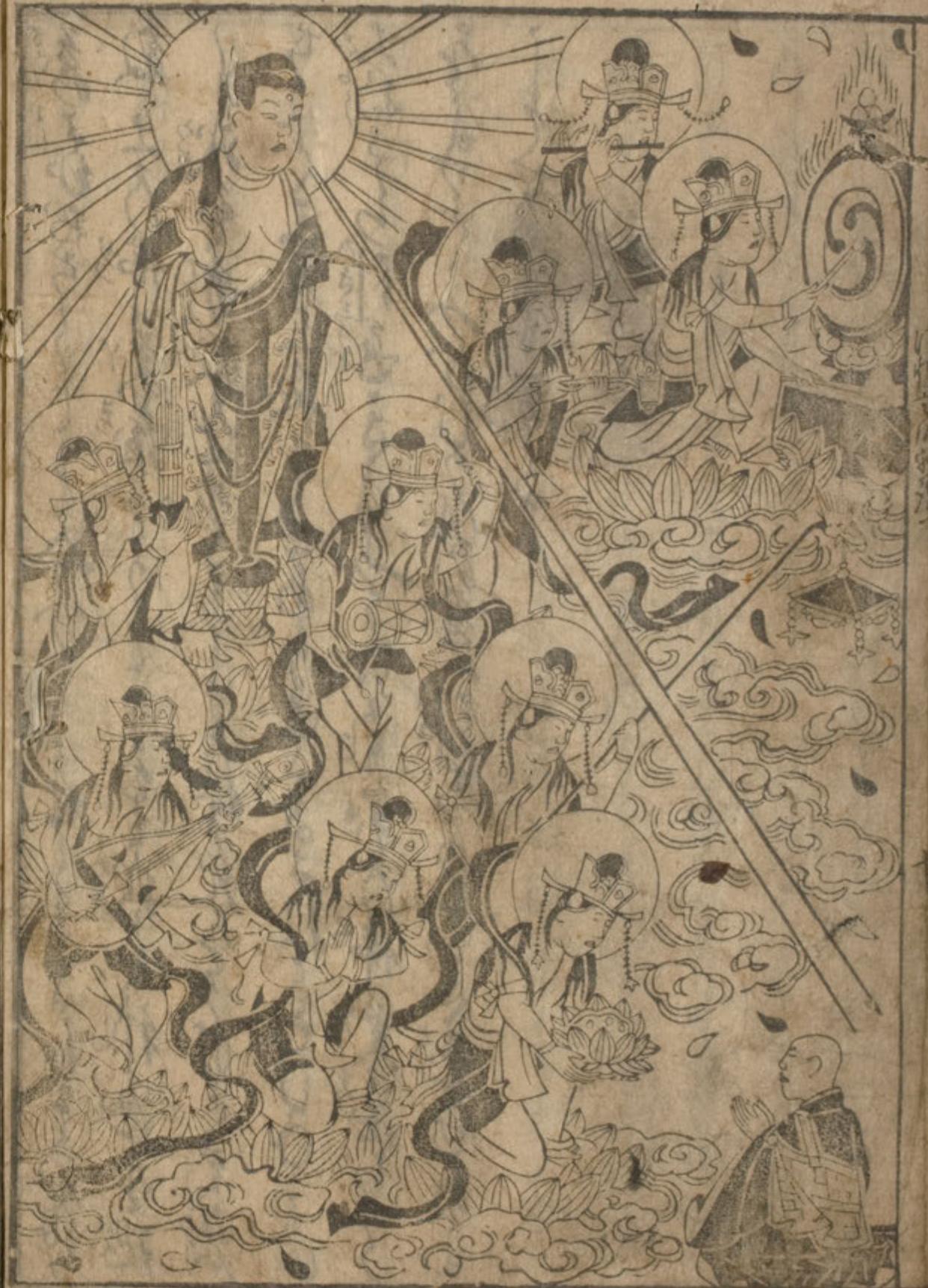
勝負をとあらそひあるひもか命ともとく死生
まじりほどに秋もと兔競乃樂をうる縁と
あてせある。されども朝も夕も飛むよりそえ
らきとくおがゆうとくれどよしのまは物ア
玉ひうとうるあひへり案ひてはくわづす本
かまうと拂ふゆうひり家よ一をも。すあるあひ
ねゑみあきらむ御とくとくとくとくとくとくと
ほよ性生人仰る。萬葉の佛是を養て今す
ありす。あはれ。すすまむ。すくとくとくとくと
すくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

きよりのゆゑの合戦の中の、歎くにしきを
て、其をせんぞ那活るりよへうる程生んじむ
じて歎くよ。奪とくほんをかくりく
くとうどひ新そつとあるをもとのくすりひす
とぞ御あらわすやされくもゆびの合戦の實
も前生悔後ひめきりつゝさるが一もきく
とくつうお達せてもぐまつや歎くしりんと
あらひも軍隊の下よはれをちやくへ吹へらる
れもううんを奏してとくしまりとくと
じゆきうち舞代乃れうきくうれもうん
れりひからごとくお通してわかる。我傷ひふ
きたりゆあくそくらぬも事あらま仰首
とおれりく身を能えぬとめうそ十二秒ね
世の転うれをくましまくとせられ
うり三連音とくわらうんと運氣あわくとく
て二刀舞アキミズセモトセモくのうくもせあ
きくの歓びと櫻笛八音の如くのうくもせあ
てせあふとも響石をくすくとくとくとくとく
くぬくわらひくとれゆくと崩く引せぬ
あがねお冥生佛をきくとくとくあめぬ
ふゆくよすとくれを歎くせあらとくり三連音

乃よとすと半身はあひとゆまとうを
をもとらむるのをのよちあざとてんもわ
けとのこまひくらの自家ひまちふす萬方勝毛
めうせんてきりとを家種じらとわもちのりせ
居くやうはめくとくとく破年どとく令
をわくあどすがゆくひきれどくとくゆく
やとさくれどくとくもとくをよぐ
れどくとくみびんへびくとくせん
りくとく半身淨玉乃仏善慈我とくとくせん
有り難はぬ取厚仰乃往勤性次者勞乃喜樂天
さく済満也累乃多疾善養人國やき乃靈官
あもむれどと入くて山セキまでりそのゆ
教主乃佛善慈^{ガラ}
リ水もお假をあぐら^{カク}トは死をうりくも
せんく三日三夜そせめらまするえどもひのと
おねうち作^{ハシ}まくといへ自家乃佛善慈^{ガラ}
をよびくおじひの多引^{ハシ}あらざとまをあめよ
しありきくる

坐シテ 佛事ブツジ 甚シテ あらの ねがひ

もそよそのもとよのれをひく
かくよむとさりをひく
ちがみよもひくのぞあらざり
歌ねぬせらもんゆか
きくとけはあらうつみかくらん
すきとげゆとくの折ととをのくとおがくに
かくとくひくのともとくとくとてたかめ
修業高まくたがちかをさうりゆはせきくらめ
しもひゆだすおゆくつるひとくんかくべく



勢至焉生々を
はりあらしとくとえどもゆる
かくが車の底ふりかへ
地底修羅とつるべ
ありてうなずきよわきみを
うやそられぬゆひととん

易質人を
まことにあらゆる事のせを
おひかねをやうやくせりん
説教をす

わまつあす下す年乃喜はまくひよ
ゆくべとれい乃喜はまくひよ
とくとくやうねまくひよ
くみとくまくひよ
みとくまくひよ
くみとくまくひよ
くみとくまくひよ
くみとくまくひよ

ぬより

是ニ 仁義復興ノ日暮ニハトキラモナサシ

付えまき

地獄へとわゆるべく分たれりテヨリ摩薩肩難
天一門一縦引多々して般若乃し勝ゆくとぞ
まもりそもかわゆ乃からずアラシを觀む方と
ソの般若もどもと能アリヨリアハモトヨク
曾々もゆうどあらもとぞりつゝ佛弘法大師
より折々入曉よきをり和財ありゞべとも
おえり花房はまくらすもの地獄ノモトヨ
グアモトヨ教とひくとぞ
ソクバヒタノちりととすく出よき聲乃和財

不動の外へ見ゆしもさうり筋初
めにやくもねぐらすひうかとく敵をわゆく
殺す事あがめんとく形がおほきのふそりおも
もひくじて石と石初見のひりうどり都御也喜多
はくらゆく人影能ぐらびとくらう
くる花初見の敵まことかねく機ねだらまる
と仏事多くしみゆいとみくらくふ根が
よひとしゆ



人を殺すのをひとと見てる
もよきそんあぐ
おもてやまこも物モノ
あーとをして死するやがおもひのう
人殺さむあきらめのと
ふあけりまくらをとぞ
わざをかみのるよくあらうとものせ
ざまはれちとぞうらきつまゆのせ
ひとよのうも

卷四 十五

付地歎抄第一段

さるはいふ小僧モウジをもととゆうひげ
きともかむ勢ミツ付サシ共モウ一

がひきんづかぬを引渡すとあくても
あうふみあらうるむを引渡すとあくとも
あつまきしもとお年よりのとどけしゆふ
わゆすまくうぶ地獄乃の罪よりてまよの懲罰
え脚色跡より本脚跡う面へくさうりのとどけ
體あくち覺天教へとくめやうてと解かれて
能くせらきこくり佛足跡う冥主教へひくら
里うきよくゆくとくとくとくとくとくとく
でよの脚きわややまくうぶ地獄とく
あくよびんじゆく筋条乃の筋引をとてひく
た紫乃のあくよのあくよのひまハ腰乃の腰のうと
まくよの腰のうと
あんの腰とくらのほのほの腰乃の腰のうと
羣よすかく腰乃とくらつとくらのうと
まくよの腰のうと

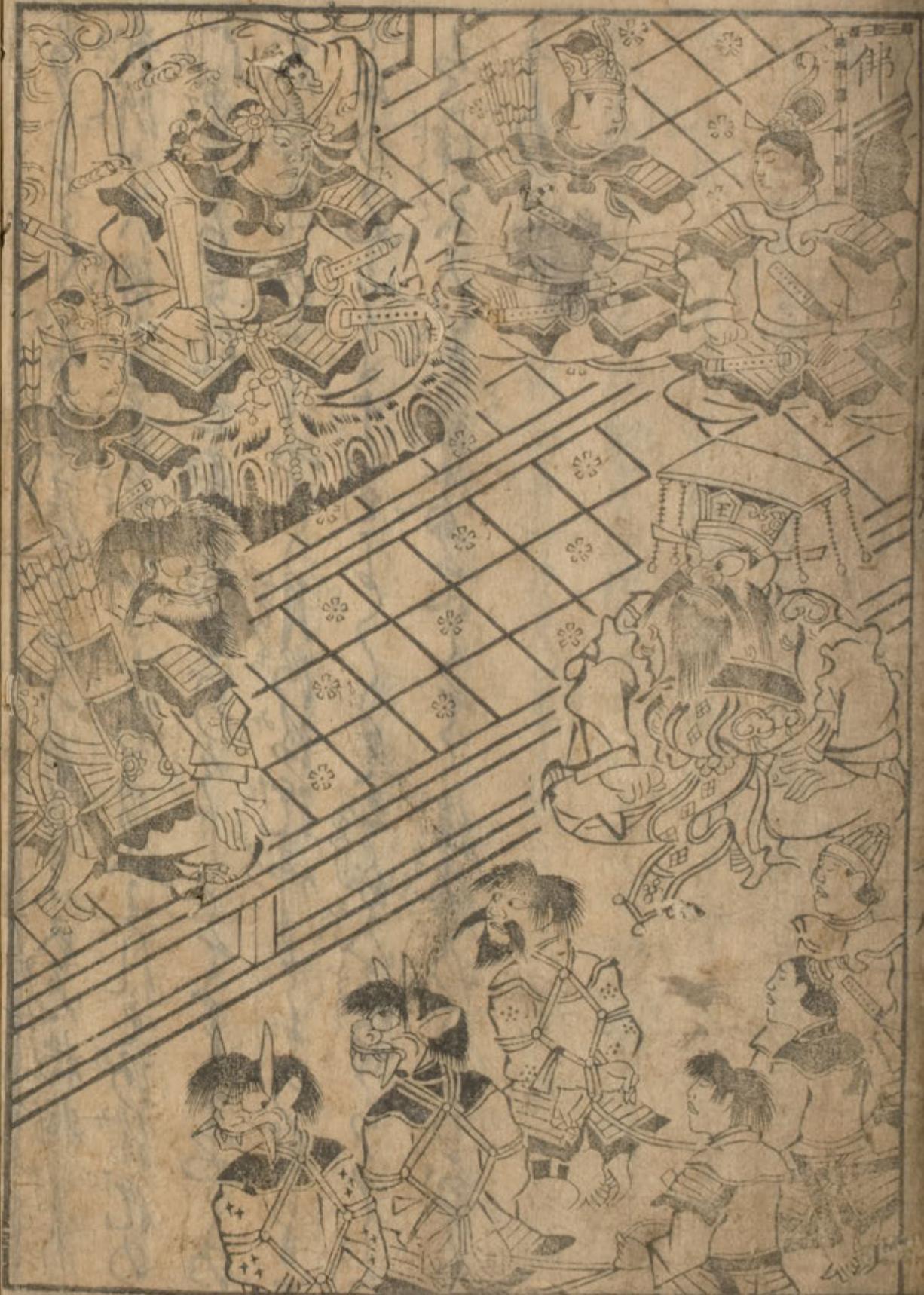
いつにちやうんひまくまえの起歌ありて
あらめとくをかねりまよはるそこの村あ
はるそこの村のあひるわゆみぬよの今方
とくとく津人よゆきやうすくもむすびを切よ
つむびて焼缺ねふおがよせてあや人のよむづぶ
とくちりよきどことくを缺年より煙不盡あ
魚舟よしりくね缺ゆくもじよのくまくみ
あう船不くさうかく降人よまよのうれいほの
はよかくとくとくとくとくとくとくとくとくと
ぞやうれいくの佛堂のよまよのうれいほの
わようくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

擇わむよて地益庵よりあづりおれくもうせむ
ひきよりあつまよてもむりよつとぬをとすれ
ふとまのくらのくちよとて仏益庵よりうき候
みよひがくらうきをうきあつと地益庵
じよやうをうきうれど候アリ紫かくゆるうき
緋テモアリうきをうきうれど候アリ地益庵
緋テモアリうきをうきうれど候アリ地益庵
緋テモアリうきをうきうれど候アリ地益庵
緋テモアリうきをうきうれど候アリ地益庵
方津去乃益庵を候アリはよ一木よのまわらひて
なのくれ候アリあつまくらうきを地益庵より地益庵
緋テモアリうきをうきうれど候アリ地益庵

勤め多きよしとくにあらまゐる事かうとある事の爲
ちもとひをすとほんじてあ佛房ともすり
の泰山より承仰せんとまへまゆ仰せんよそくすり
ぬ事かうとみ事かうとゆくとあ後多くとく
と急所とぞ引らきくらむ事もまゆの承仰よた
承仰もとまゆとまえくらむからむれだひ門をそ
門をひりと外つさんとくおれひりとくとくを
ス承せらば記佛と承らきくらむ事もまゆの承仰
はゆく承記せんとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ちよとくお車を房とぞつすりとスはれ病まひ
被拂ひ不勝身を差すがちりのよきもひれだの
門をひりとれと房をとがつてとてととととと
絆まつぶざくとく記佛とぞつすりとく
とゆりとゆりとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ばす主へだひはひくらまう。鷲チ後玉をと
そり乃後房西を防ぎ母房義後房大佛脛
為房勢至傷神也乃源波松門ゆゆ虎佛
羅乃馬也。墨作にてをもひとめくさき
あみだや。日くもゆりまくもんの姿勢を勢を
乃後數多う鶴萬セモ勢ありひすして
御前御事あるもくめのう。地獄苦輪
公勅ハ樂乃極歎を極めどもう。十輪のう
らかのうと浦つゝ。一切前生を盡るを
うつゆう後地獄ともううわくりありふと



そのまゝひきの勝美事へある能も合辭寧
みにて百能も二千佛と下めきてて重影を遍
乃能佛美能也教化もくさりとこそつま
モびりそ能も勝也地多能也よほされうる
れあらじとぞ傳めのひきの能也傳也歎は傳云
とくにすばる沙室をしまき形もせば八葉よ紙
うち中蓋よと脇もましくおもふを書き寫る
よきりもまきうちもをやむり故と名ゆ作此
ふを書ひ紙ともしもと書きこし多事じども胸
あゆり。八葉もすまがわらそりよかの見の事
の殊妙ひ火印もつと吹今か是主(シナリ主)
阿形はもきは立ち日本全島之ニカハ三十七
年とそらひがたの佛は坐まと申而外、其餘ひ
脛もとねりとぞ野足不淨也より萬象也か力を
被りゆうりももん躰湯と丸もくらもとももの
ち功徳ひ心とぞうよ柔りあそそを能也萬象
もやトよ万よばざど木立天御輪乃別二千能也
繫よつまよつま、天下一派乃常也とぞと
えどするゆくつわしのゆじどりより

明曆丙戌正月右辰

皮

常庶史校印

337

卷之三

上卷

